

夢・箱庭・風景構成法に関する一考察

—イメージとそれを体験する主体との関係性の視点から—

千葉 友里香

1. イメージとそれを体験する主体との関係性とは

“私たちの日常の暮らしは、けっして眼のまえに見えているものや事柄に対する行動だけで成り立ってはいない。暮らしにとってたいせつなことは、眼のまえに見ていないことの方がむしろ多いといえよう”。これは、藤岡（1974）が私たちの暮らす世界において、イメージがいかに大切かを述べている言葉である。私たちの心には、自身が生きてきた中で見たこと、聞いたこと、触れたこと、体験したこと、感じたことなどが意識せずとも自然と積み重なり、それがイメージとして、目の前に現れるあらゆるもの、出来事に対して生じてくる。心理臨床では、クライアントの語りや表現からその人の心の在りようを理解していくが、その際、クライアントの中で生じ、変容していくイメージに目を向けることは大切である。また心理療法において、イメージ療法や夢分析、箱庭療法、描画法、プレイセラピーなどイメージに特に焦点を当てる様々な技法が用いられ、それによってクライアントが変容へと至っていった事例も数多く報告されている。このようなイメージの性質の一つとして、河合（1991）は自律性を挙げているが、イメージの自律性により、それを生み出した主体、表現した主体、体験する主体にとっても意図されていないようなイメージが表れてくることになり、主体自身がそのイメージに関わることで、何かを感じたり意味を見出したりすることは、心理療法における主体の変容に結びつく心の動きであると言える。そして、そのようなイメージとの関わりにおける主体の変容に迫るには、自律的なイメージとそれを体験する主体との間にはどのような関係性があるのか、イメージとの関係性において主体にはどのような体験がなされているのかについて、目を向ける必要があると言える。

心理臨床における自律的なイメージの重要性を最初に指摘したのは、分析心理学を創始した Jung, C. G. である。Jung は主に、無意識と意識の関係、無意識と自我の関係として、無意識との関わりが主体を変容に導くことを述べた。特に、自らの体験をもとにアクティブイマジネーションという技法を提示し、自律的なイメージに吞み込まれず、無意識と対話をする意識の態度について述べている（Jung, 1933/1982）。また、ユング派の分析家である Neumann（1971/2006）も、無意識と意識の関係、その分化のプロセスを発達的に捉え、神話の観点から述べている。このように、無意識から生まれる自律的なイメージとそれを体験する主体との関係性は以前から取り上げられており、現在我が国においても、心理療法の様々な技法、臨床事例研究の文脈において論じられている。ユング派心理療法について述べている河合（2013）は、箱庭や夢、

描画を取り上げ、“イメージとの関係”について論じている。そこで重視されているのは、主体がイメージに包まれ、内側から体験するという関係の在り方であり、主体がイメージに入り込み、イメージそのものを体験することが治癒への可能性を開くとしている。そのようなイメージとの関わりにおいて、同時に、主体がイメージを“外から意識していく”在り方が重要であることについても述べられているが、それは主体がイメージに入り込んでいる状態であっても、イメージをイメージとして外側から把握できなければ、主体がイメージに呑み込まれる状態になってしまうからである。また、イメージは身体感覚を伴って主体に体験されることがある（福留，2000；濱崎・山本，2010 など）。それは、身体を巻き込むような深いイメージの体験であると同時に、身体を通してイメージの存在を主体が強く訴えかけられるような体験でもあると言える。さらに、イメージをイメージとして“外から意識していく”在り方が強まると、主体の中にイメージに対する現実的視点、客観的視点が生じ、イメージとの間に距離が感じられることとなる。特に、体験されたイメージを主体が言葉で表現しようとするとき、違和感が生じることがあると言われているが（大谷，2008）、このような場合、主体がイメージから離れ、イメージを外側から把握している側面が強いと言えるだろう。さらに片山（2015）はプレイセラピーの事例を取り上げ、主体がイメージを表現することで、それを自らの中で抱える在り方について述べている。そこには、自律的なイメージを主体が自身におさめられるものとしていくプロセスが存在しており、主体が現実を生きていく上で、重要なプロセスであると考えられる。

このようにイメージとそれを体験する主体との関係性においては、身体感覚や言葉についての様々な体験がなされ、自律的なイメージに主体が包まれ、その自律性を没入的に体験することや自律的なイメージを表現することで主体がイメージを内在化していくことなど、イメージとの関わりの中で自身の新たな在り方を見出していくという意味で、主体の変容のプロセスが存在していると考えられる。一方、臨床場面を想定すると、イメージと主体との一般的な関係性の在り方だけでなく、イメージを扱う様々な技法においてイメージとそれを体験する主体との関係性はどのように表れてくるのか、そこで主体にはどのような体験がなされているのかを具体的に検討していく必要があると考えられる。川崙（2007）は、自律的なイメージが表れてくる心理療法の技法である夢、箱庭、風景構成法の構造的差異について述べているが、同じように自律的なイメージが表れてくる技法であっても、箱庭では実際のミニチュア、砂などが用いられるが夢ではそうではないというように、技法ごとにその構造は異なるため、イメージとの関係性において浮かび上がってくる主体の体験も異なると考えられる。しかし、これまでにそのような視点から、自律的なイメージが表れてくる技法について論じている研究は見当たらない。そこで本論文では、川崙（2007）や河合（2013）にて並列的に検討されていた夢、箱庭、風景構成法という三つの技法を取り上げ、その構造の差異から、夢と夢み手の関係性、箱庭と作り手の関係性、風景構成法と描き手の関係性には、それぞれどのような特徴があるのか、そこで主体にはどのような体験がなされているのかについて検討することとする。なお本研究は、先行研究をもとに各技法の構造の差異から夢と夢み手との関係性、箱庭と作り手との関係性、風景構成法と描き手との関係性について論じていくため、理論的な側面からの仮説生成的研究の位置づけであることを述べておく。

2. 夢と夢み手との関係性 ―主体の二重構造／感情／言葉―

(1) 主体の二重構造

まず、夢と夢み手の関係性について取り上げる。夢を箱庭、風景構成法と比較した際、技法の構造として大きな特徴であるのは、箱庭や風景構成法はセラピストの前で初めて表現されるのに対し、夢は、面接室以外の場でクライアントが見たものをセラピストに語るという形で表現されることである。さらに厳密には、夢を見ているのは寝ている間のクライアントであり、心理面接では起きた際に覚えている夢が報告されることになる。そして夢は、起きてからの主体にとって「よくわからないもの」と感じられ、「なぜこんな夢を見たのか？」という疑問が沸いてくることも多い。このような夢の不可解さについて河合（1991）は、以下のような例を挙げている。

“ひとつの例をあげよう。四十歳代男性の夢である。

夢：何かに追われて逃げている。そのうち、自分が一人の男をひどく傷つけ、逃走中であることがわかる。家に逃げ帰りほっとしたが、家の前に追手が迫ってきているのを知り、裏口へ行こうとするが、裏口にも追手が待ち伏せていると知り、茫然とする。もう駄目だと思ったとき、自分が傷つけたのは同僚のA だったらしいと気づく。A が傷ついて倒れている姿が見えてきたところで目覚める。

この夢を見た人にとって、この夢はまったく不可解である。自分が人をなぐったり傷つけたりすることなど考えられない。人に追われるような悪いことをした覚えがない。同僚のA に対して敵意を持っていることもない。まさに「ないないづくし」で、この夢は「わけがわからない」と言うことになる。”

このような不可解さは、主体が夢をコントロールしているのではなく、夢が自律的に進んでいることを意味している。箱庭や風景構成法においても「なぜこんな箱庭を作ったんだろう？」、「なぜこんな絵を描いたんだろう？」と作り手、描き手が感じることはあるが、箱庭や風景構成法では、イメージの自律性が働きながらも作り手、描き手自身がある程度意識的に、自分で表現したと感じられるのに対し、“夢は眠りの中で、意識の主体性がほとんどなくなったところに生じてくる”（西村，2002）と言われるように、主体のコントロールが全く効かないところで生まれてくると体験されることが多いと言える。このことをイメージとそれを体験する主体との関係性の視点から捉えると、夢と夢み手の関係性においては主体が二重の構造として体験されていると考えることができる（図1）。目覚めた後に夢を見ていたことを記憶していて、それをセラピストに語るという主体A がいるが、夢の中で歩いたり、走ったり、怒ったり、怖がったり、様々に振る舞ったりしていたのは、別の主体B であるように主体A には体験されるということである。主体B のような夢を体験している主体については、“夢自我”（牧，2002 など）と呼ばれ、目覚めた後のその人と区別されて論じられることもあり、先の河合（1991）の例で言えば、追われて逃げていたり、逃げ帰ってほっとしたり、茫然としたりしているのが主体B、目覚めた後にこのような夢を見たことは覚えているが、「わけがわからない」と感じているのが主体A ということになる。一方で箱庭や風景構成法で

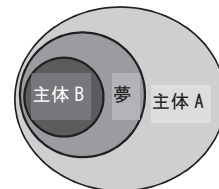


図1. 夢と夢み手の関係性における主体の二重構造

は制作後、描画後に、「なぜこんな作品を作ったのか?」、「なぜこんな絵を描いたのか?」という感覚が沸き上がることはあっても、表現している主体と表現後の主体が別であるように体験されることは少なく、一般的にそれを表現したのは自分自身であると一貫して体験されることが多いと言える。これには夢のような、睡眠中と覚醒時という主体の明確な意識水準の差がないことが大きく関わっていると言えるが、それにより夢では、先に示した河合（1991）の例のように、夢を体験した主体（主体 B）と起きた後の主体（主体 A）の間には、つながりがないように感じられることも生じるのだと言える。主体 B の体験が主体 A にとって必ずしも自身の体験として受け止められる訳ではないため、夢が主体 A に訴えかけたり、主体 A が夢に表れるイメージの自律性に関わろうとしたりすることがなければ、夢は夢み手の中で消えてゆき、夢み手に意味をもたらすこともなくなってしまう。

（2）夢における感情

そして、このような夢と夢み手との関係性の中で、夢み手に訴えかけるという意味を持っているのが、夢に表れる多彩な感情であろう。“感情に焦点を当てようという努力は、しばしば夢を探索していくことによってうまく促進されるし、成果があがるものである。事実、夢が臨床的に役立つかどうかということは、夢の中の感情にどれだけ注意が払われているかということと正比例しているのである。”（Bonime, 1962/1987），“一般に、夢の解釈にとってもっとも信頼に足る要素は、夢のなかで示される情動である”（Gutheil, 1951/2015）などと述べられるように、心理療法で夢が扱われる際には、夢に伴う感情に焦点が当てられることが多い。また、夢には様々な感情が表れてくることが知られており、名島（2008）によると、Hall & Van de Castle（1966）が怒り、不安・心配、幸せな気持ち、悲しみ、混乱・狼狽の 5 つの感情、Maybruck（1989）が怒り、恐怖、苦痛、楽しさと愛の 4 つの感情、岡田（2001）が不安感、緊張感、恐怖感、あせり、嫌悪感、悲しみ、怒り、驚き、羞恥心、幸福感、うれしさ（あるいは楽しさ）、希望（あるいは期待感）、安堵感といった 13 の感情が表れることを示しているという。さらに名島（2008）は、それらに加え、罪悪感、嫉妬、劣等感などを含んだ 16 の感情が表れることを見出しており、夢には、現実での生活と変わらない多彩な感情が表れてくることが分かる。Bonime（1962/1987）は、夢に表れる感情には“象徴化された感情”と“体験された感情”があるとしているが、これらの多彩な感情は“夢を見ている間に、現に体験されている感情的な構成要素”であって“体験された感情”として表れてくるものであり、イメージと主体との関係性の視点から捉えると、主体 B に体験された感情を指していると言える。“面接の中でのクライアントの表現は控えめで穏やかであるのに、爆発的な情動表現に出会ったりすると、「これは私ではありません」というようなクライアントも少なくない”（鑪, 1998）と述べられるように、イメージに伴う様々な感情は主体にとって強いインパクトをもたらすものであり、主体に自律的なイメージの存在を強く感じさせるものであると言える。夢においてこのような強い感情体験がなされると、主体 B に体験された感情であっても、主体 A が自身の体験として向き合い、受け止めていくような心の動きが生じやすくなり、なぜそのような感情が表れてきたのか考えたり、夢での感情体験について語ったりするなど、主体 A がイメージの自律性に関わっていくきっかけになると考えられる。

(3) イメージと言葉

さらに、箱庭、風景構成法との構造の比較から、夢み手が夢を語るということについても述べたい。千葉（2013）は、箱庭制作後に箱庭を語るることによる作り手のイメージ変容の体験について検討しているが、4つの体験型のうち“客観化型”では、イメージから離れ、イメージを客観的、現実的に捉えるような体験が見られたとしている。また中野（2010）も同様に、風景構成法描画後の対話（PDI）によって、“イメージとある程度距離を置いて現実吟味”する心の動きが見られた描き手がいたことを述べており、箱庭、風景構成法では、体験を言葉にすることによってイメージへのコミットが弱まり、イメージを客観的に捉えるような変化が生じることがあると言える。このような客観視の体験は、イメージが多義的なものであるにも関わらず、言葉によってイメージが一義的に固定されてしまうこと、言葉によって他者に伝える際に客観的視点、現実的視点が意識されることにより起こっていると考えられる。一方、千葉（2013）や中野（2010）では、言葉にすることによって、イメージが鮮明になったり広がりを持ったりする体験があることについても述べられており、必ずしも言葉がイメージを一義的に固定するとは言えない。藤原（2003）は、“内的なこころの表現からの方向に立脚”する〈臨床イメージ表現としての言語〉と、“外的に決められた語義からの方向に立脚”する〈一般言語〉を分け、このような言葉の用いられ方の違いにより、主体の心の動きに違いが生じることが述べている。このことをイメージと主体との関係性の視点から考えてみると、図2のように、主体がイメージに入り込み、没入したまま〈臨床イメージ表現としての言語〉が用いられると、言葉によって主体とイメージとの間に距離が体験されることはなく、ともすれば主体がイメージを言葉にすることで、イメージが広がった、深まったと感じるような体験が生じることにもつながるだろう。しかし〈一般言語〉が用いられると、図3のように言葉によって主体がイメージから離れ、客観的に捉えることが生じ、主体は現実へと移行し、イメージに違和感を抱く体験になるのだと考えられる。

では、夢における言葉の体験とは、どのようなものだろうか。“夢というのは、しばしば視覚的なイメージと考えられているが、夢はテキストとみなすことができる”（河合，2007）と述べられるように、心理療法の場で、夢は言葉によって伝えられるものである。セラピストと共有できる形で作品が目の前に表れてくる箱庭や風景構成法と違って、夢は夢み手の内面でのみ感じ取れるイメージであるため、言葉によって表現されない限り、セラピストに伝えることはできない。そして夢については、箱庭や風景構成法で体験されるような、言葉にすることによってイメージそのものの豊かさが薄れ、客観視されるような体験については述べられておらず、それどころかクライアントとセラピストとの間で、言葉によって積極的にやりとりが交わされることが多いと言える。これは、Freud, S. や Jung, C. G. が心理療法で夢を扱い始めたころから行われてきたことである。Jung（1931/1997）は、夢み手が「モミ材のテ



図2. イメージに沿って言葉が用いられる際の関係性

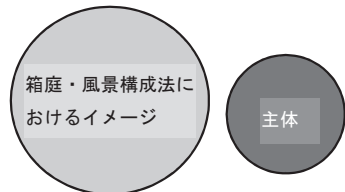


図3. イメージから離れて言葉が用いられる際の関係性

ーブル」の表れる夢を見たときに、『モミ材のテーブル』という言葉にどんな意味があるのか、私がまったく知らないと思ってください。そして、それがどんな種類のものを私が理解できるようにやり方でそれについて話し、その歴史を教えてください”と夢み手に問い、言葉によって“夢イメージのほぼ全体の内容と関係を結ぼうとする”と述べている。さらに鑑（1998）は、“夢のイメージが生き生きと面接者と分けもたれていることが重要なのである…（中略）…面接の場で話していること自体が重要な体験の場となるのである。”として、語ることによりイメージを共有すること、感想や連想を聴くことの重要性を述べている。夢と夢み手との関係性の視点から捉えると、夢に表れてきたものについての夢み手にとっての意味を述べたり、夢の体験を語ったりするのは主体 A であり、夢について語ることは、主体 A が夢のイメージに入り込み、言葉によってイメージに関わっていくこと、主体 B の体験を主体 A が自らのものとして受け取っていくことという意味を持つのだと考えられる。図 1 に示した夢と夢み手との関係性をもとに考えると、主体 A がイメージに入り込んで言葉が用いられることで、主体 B の体験を主体 A の体験として、すなわち同じ一人の主体の体験として、自身の夢を受け止めていくことにつながるのだと言える。

3. 箱庭と作り手との関係性 ―三次元性―

“箱庭作品は視覚像として三次元的に構成される”（山本，2002）と述べられるように、夢、風景構成法と比較した際の箱庭の大きな特徴は、箱庭が三次元のものであることであろう。そのような三次元性を有している箱庭の砂やミニチュア、砂箱といった用具について、作り手にとってどのような意味があるのかは、これまでも様々に論じられてきた。砂は、実際に触れることで退行を促すような作用があると同時に、身体や主体の感覚に訴えかける働きがあるとされており（岡田，1993）、片山（2008）は“心から働きかける面の強い心理療法の中で、砂によって直接身体の方からも働きかけることのできることは大きな利点がある”と述べている。また片畑（2003）は、箱庭における身体感覚がイメージ体験にもたらす影響について調査研究から検討しているが、ミニチュアに触れることで置く場所のイメージが明確化したり、砂に触れることで動的で開放的な感じが沸きやすくなったりすることを述べている。このように、箱庭が三次元的なものであって、作り手がそれに触れながら制作していく過程の中で、触覚という身体感覚によりイメージが刺激される体験があると言える。

一方、“実際にミニチュアを掴み、砂の上に配置していただくでも、生の体験としての感触（ミニチュアの厚みや触感、砂の上に安定させるときに砂の発する音、同じくミニチュアを通して感知する触感）が立体的な広がりを示唆するのである。これは、箱庭制作が触覚を通して身体（実体があり、立体的である）へと働きかけるといふ特徴を有していることである。つまり、「箱庭」の場合、いかに平面的に制作しても、常に三次元的な示唆を含んで体験されるということになるのである”と山本（2002）は述べている。これは、箱庭が三次元的な性質を有していることで、生の体験としての感触を伴って作り手の身体に働きかけ、実体としての箱庭の存在が作り手の前に表れてくることを示しており、砂箱の中で砂、ミニチュアを用いて制作していく過程では、目の前にあるミニチュアがイメージを伴いながらも、実体あるミニチュアであるということも作り手に感じられているのだと考えることができる。例えば、犬のミニチュア

を手に取ったとき、飼っている犬の可愛いイメージ、小さい頃に犬に噛まれた凶暴なイメージ、従順で素直、忠誠的なイメージなど、作り手によって様々なイメージが刺激され、ミニチュアはそのイメージを伴ったものとなる。一方で、手に持った感触や重さ、質感、砂に置く際の音などからは、主体の内的なイメージであるだけでなく、実際に存在している「犬のミニチュア」であることが感じられているのである。このことをイメージとそれを体験する主体との関係性の視点から考えると、主体がイメージ世界と現実世界を行き来しているような体験、あるいは、両方の世界と常に接しているような体験があると考えられることができるだろう。

このような体験は、精神病圏のクライエントに箱庭を導入することには慎重にならねばならないとされてきたこと（中井、1972；山中・武野、1981）とも重なる。前述のように、箱庭制作中には現実存在しているミニチュアや砂を用いながらイメージ世界に没頭していくため、現実とイメージが交錯し、その境界が曖昧になる。視覚だけでなく触覚からも様々なイメージが刺激され、作り手のイメージの働きが活性化することが箱庭療法の特徴であるが、自我境界の薄いクライエントの場合、イメージと現実の区別がつかなくなってしまうことにもつながるのである。このことについては井原（1993）が、“箱庭の侵襲性の高さと、三次元において表現がなされることからくる、この事実の世界とイメージの世界が共存しているという箱庭の特徴に起因しているとはいえないだろうか”として、箱庭の三次元性が侵襲性の高さに結びついていることを示唆していることとも重なる。また、箱庭において主体がイメージと現実とを行き来するような特徴について、河合（2013）は Winnicott, D. W. (1971/1979) の移行対象の概念を用いて、以下のように説明している。“箱庭は具体的に手で触れたり、目にしたりもできるので、心的なものでありつつ、具体的な物になっている。それは内的な対象でも外的な対象でもない移行対象に近いと言えよう”。つまり三次元性を持った“具体的な物”であることにより、完全に主体のイメージの中だけのものではなく、“自分の中のものでもないし、またはっきりと自分から区別された自分の外にある対象でもない”（河合、2013）移行対象のように体験されると言えるのである。

さらに実際の砂箱が用いられることによっても、箱庭では内と外といったテーマが表れやすい。箱庭では、“枠外にまで世界が拡張されるときは、自我の把握し得る範囲を越えて表現がなされている危険性が高い”（河合、1969）と述べられるように、砂箱の中に世界を作っていくことが大切だとされ、それを超えようとする表現はセラピストによって中止されることもある。砂箱には、作り手のイメージが広がりすぎるのを守るといった心理的な意味があり、そこには先に述べたような、箱庭におけるイメージと現実の境界を表現の場において明確にするという役割が存在していると言える。一方、臨床場面においては、セラピストの判断により砂箱の外に制作がなされることもある。佐藤（2013）では、砂箱の枠や砂箱の外にミニチュアが置かれた事例、石原（2007）では、砂箱の中でなく丸テーブルの上にミニチュアが置かれた事例について述べられているが、ここで特徴的なのは、佐藤の事例でも石原の事例でも、もともと枠や境界が心理的なテーマとなっていた作り手がこのような箱庭を制作したことである。しっかりと制作を見守る見守り手が存在する中であれば、砂箱の内か外かということ自体を表現の一部とした箱庭が作られ、それを作り手の主体的な表現として受け取ることもある。このように砂箱という視点から見ても、箱庭との間で境界に関する体験がなされやすい特徴があると考えられ

るだろう。

ミニチュアや砂という実際の物を通してイメージと現実に接する体験、主体にとって内的対象でも外的対象でもない移行対象としての体験、砂箱における境界の体験など、箱庭はその三次元性により、イメージとの関係性において境界に関するさまざまな体験が生じやすい特徴があると考えることができる。そこでは、主体が境界の内にいるのか外にいるのか、ということだけでなく、境界自体をどのように体験しているのかという点に目を向けることが大切になると考えられる。またそのような境界の体験は、主体がイメージを内側から体験するのか、外側から理解するのか、イメージに没頭的に入り込むのか、現実的に捉えるのかという点に関わっていると考えられ、夢と夢み手との関係性における感情や言葉と同様に、箱庭用具とそれに伴う身体感覚にも、イメージと主体との関係性の変化を促進させる働きがあると言える。心理臨床においては、枠に留まることが難しくそれを超えてしまうことや自他の境界の曖昧さなど、境界がテーマとして表れてくることは多くあるが、セラピストの見守りの中で、イメージとの関係において境界の体験をすることは、クライエントにとって大きな意味を持つと言えるだろう。

4. 風景構成法と描き手との関係性 ―見守り手の言葉と他者性―

ここからは、風景構成法と描き手との関係性について述べる。風景構成法は自由な描画ではなく、見守り手がアイテムを一個一個教示し、描き手がそれを描き入れていくという構造が存在している。これを描き手の視点から捉えると、アイテムを言葉によって聞いたのちにそれをイメージによって表現することになるが、ここでの言葉とは、「川」、「山」、「田」といった見守り手の決められた言葉であり、見守り手に発せられた言葉を基点として、描き手がイメージ世界に入っていくと考えることもできる。このように見守り手の言葉が基点となるということは、描き手のイメージが自由に広がりすぎることを制限するような意味があり、大谷（2009）が“風景構成法の特徴を見てみると、自由画とは違って、かなり構成度が高いため必然的に自我の関与する割合が大きくなる”と述べているように、自我の関与の中で描かれていくことになる。このことは、風景構成法が二次元であることと同時に、自我の弱さを抱える描き手であっても、箱庭や夢と比べると安全に施行できると考えられていることの理由でもあるだろう。

一方で、見守り手の言葉が基点となるということは、風景構成法と描き手の関係性において、もう一つの意味をもたらす。皆藤・中桐（2004, pp.57-58）では、風景構成法にて「川」を描こうとする描き手の、以下のような体験が記述されている。

“その場所に、「じゃあ、かわを」という声が、響いた。「かわ」は、わたしにはなかなかやってこなかった。…（中略）…わたしは目をつぶった。もう一度、サインペンを握り、座り直し、正座をして姿勢をただし、少し大きく静かな呼吸をした。目をあけて（かわ）、と唱えようと、「川」はやってきた。わたしはまるで、その川のただなかにいるかのように、その川に溶けているかのように、川だけが世界だった。どう描いていいのか、わからなかった。この世界のどこが川でないのか、見えなかった。〈川。川。……〉と、戸惑いとともにしばらく唱えていると、しだいにわたしが川の流れから出てきた。わたしが身体というカタチをもって、川を眺める場所に、出てきた。けれど、それでもけっして、わたしは『自然に』川を描くことはできなかった。まるで、川の輪郭を描くことをのぞんでいないかのように、手が、身体が、ひどく震え

た。とても不自然な場所に置かれている感覚、違和に満ちた切なくかなしい場所に置かれている感覚、が、わたしを覆っていた。それでもわたしは、はじめの一本の線を描いた。描いた、というより、なぜか描けた、という方が正しい感じかもしれない。川を描いた後、それを眺めながらどきどきした。小刻みな身体の震えは止まらず、手は、とても冷たかった。”

ここでは、見守り手の言葉を基点として、描き手が自らのイメージを探っていく生の体験が記されており、同時に風景構成法と描き手との関係性の中には自然と、主体にとって自らの外側からやってくるものとしての見守り手の言葉が明確に含まれていることが分かる。見守り手の言葉は描き手にとって、イメージ表現の一つの基点、安全弁となると同時に、それは描き手が、あるイメージを表現することを強いるものでもあると言える。このように、見守り手の言葉という他者性を含みながら生み出されていく風景構成法であるが、描き手の目の前に現れてくるのは自身が描いた絵であり、描き手は他者性を含みながらも自分自身のものとして、目の前の絵を受け取ることになる。高橋（2014）は、アルツハイマー型認知症を抱える高齢者の風景構成法の調査事例を取り上げる中で、描き手が風景構成法作品を自身のものとして引き受けられず、見守り手が描いたとする事例について述べており、他者性を含みながら描かれていった風景構成法を自らのものとして受け取ることが、描き手にとって自明なことではないことがわかる。一方、風景構成法では、見守り手の言葉によりアイテムを描き入れていく素描段階の後に、彩色段階、PDI（描画後の質問）の段階を控えている。彩色段階では、描き手が自由にイメージに関わることができ、PDI では言葉によって自身のイメージに向き合うこととなるが、それらの段階を経ることが、内的に生じてくる自律性と外側からやってくる他者性が混ざり合って生じたイメージを、描き手自身ものとして受けとめていく過程となっていると考えられるだろう。

夢と夢み手の関係性について述べる中で、夢が主体にはコントロールできないものとして表れてくることを述べた。そして箱庭でも、“意識と無意識のせめぎあいのなかでできあがってくるもの”（桑原，2004）と述べられるように、主体の思ったままに作品ができあがるわけではない。しかし風景構成法の描き手は、自身の自律的なイメージを体験すると同時に、そこに表れてくる見守り手の言葉、そしてその言葉の体験から際立つ見守り手との関係をも体験することとなり、イメージとそれを体験する主体との関係性において、見守り手の存在を避けて捉えることができないことを明確に示していると言えるだろう。

5. 総合考察と今後の課題

本論文では、夢、箱庭、風景構成法の技法としての構造の差異をイメージとそれを体験する主体との関係性の視点から捉え、それぞれの特徴、そこで生じている主体の体験について考察してきた。夢と夢み手との関係性においては、夢み手にとって、心理療法にて夢を語っているのとは別の主体が夢の中で振る舞い、主体が二重の構造になっているように体験されることが特徴的だと考えられた。そのような関係性の中で、夢で生じる生々しい多彩な感情を受け止めたり、言葉によって夢に関わったりすることは、現実の主体が夢を自身のものとして受け止めていく意味を持つと言える。箱庭と作り手との関係性においては、砂、ミニチュア、砂箱といった三次元の用具を用いることによって主体の身体感覚が刺激され、現実とイメージの両方の

世界と接するような体験がなされること、砂箱という枠が存在することによって、そこで境界に関する体験がなされることが特徴的であると考えられた。さらに風景構成法と描き手との関係性においては、見守り手によるアイテムの教示という構造が、イメージが広がりすぎることを防ぐ守りの意味を持つと同時に、描き手にとってその言葉が他者的に表れ、描画によって見守り手との関係性そのものが体験されることが特徴的だと考えられた。三つの技法をイメージとそれを体験する主体との関係性という視点から捉えることで、各技法それぞれにおいて、イメージに伴う感情の体験やイメージを言葉にすることにおける体験、身体感覚の体験や境界に関する体験、セラピストとの関係性についての体験などが、自律的なイメージとの関わりの中で立ち現われてくることを示すことができた。夢、箱庭、風景構成法を用いる心理療法のプロセスにおいて、表現されたイメージの内容を理解していくことは勿論大切なことであるが、クライアント自身の中から生まれるイメージとの間でこのような体験がなされていることを知ることは、夢、箱庭、風景構成法を用いたイメージとの関わりにおける主体の変容機序を明らかにしていく上で非常に重要な意味を持つと言えるだろう。

本論文では、心理療法でクライアントを理解し、変容へと導いていくための技法としての夢、箱庭、風景構成法を取り上げ、各技法の構造の差異から浮かび上がってきたイメージとそれを体験する主体との関係性における特徴について述べたが、感情や言葉、身体感覚、境界、セラピストの存在などについての体験は、その技法でしか表れないものではなく、他の技法にも通底して表れてくる可能性のある体験であると考えられる。また本論文で示したイメージと主体との関係性の在りようは、あくまでその技法の構造から考えられる特徴を述べたものであり、夢、箱庭、風景構成法において表れてくるイメージと主体との関係性、その体験の全てであるとは到底言い切れない。さらに述べると、イメージと主体との関係性の在りようそのものにもクライアントの個が表れ、クライアントの数だけイメージとの関係性の在りよう、その体験が存在していると言えるのではないだろうか。今後は、本論文で示したイメージと主体との関係性の特徴を仮説としながら、臨床事例、調査事例の検討を丁寧に進めていくことが必要であり、多くの研究を積み重ね、関係性の様々な在りようを示していくことで、イメージとの関わりにおける主体の体験の様相と、それに伴う主体の変容の機序を明らかにしていくことができるだろう。

謝辞：本論文の執筆にあたりご指導いただきました皆藤章先生に、心より感謝申し上げます。

6. 参考文献

- Bonime, W. (1962). *The clinical use of dreams*. New York: Basic Books. (鐘幹八郎・一丸藤太郎・山本力 (訳) (1987). 夢の臨床的利用. 誠信書房.)
- 千葉友里香 (2013). 箱庭を語ることにおけるイメージ変容の体験. 箱庭療法学研究, 26(1), 17-30.
- 藤岡喜愛 (1974). イメージと人間. NHK ブックス.
- 藤原勝紀 (2003). イメージを使いこなす. 臨床心理学, 3(2), 173-179.
- 福留瑠美 (2000). イメージ体験が繋ぐからだと主体の世界. 心理臨床学研究, 18(3), 276-287.

- Gutheil, E. A. (1951) *The Handbook of Dream Analysis*. New York: Liveright Publishing Corporation.
(鑑幹八郎 (監訳) (2015). 夢分析の手引き—心理療法の実践のために. 創元社.)
- Hall, C. S. & Van de Castle, R. T. (1966). *The content analysis of dreams*. New York: Appleton-Century-Crofts.
- 濱崎碧・山本力 (2010). 死別に伴う「悲嘆夢」が遺族の喪の仕事に与える影響. 心理臨床学研究, **28**(1), 50-61.
- 井原彩 (1993). 風景構成法と箱庭における空間の表現の特徴について. 箱庭療法学研究, **6**(2), 38-49.
- 石原宏 (2007). 砂箱という仕掛け. 岡田康伸・皆藤章・田中康裕 (編). 箱庭療法の事例と展開. 創元社, p.16-25.
- Jung, C. G. (1931). Die praktische Verwendbarkeit der Traumanalyse. *GW16*, § 294-352. Olten: Walter Verlag. 1971. (Storr, A. (編著). 皆藤章 (訳) (1997). 夢分析の実践的使用. 山中康裕 (監修). エッセンシャル・ユング. 創元社, pp.184-205.) (Storr, A. (Ed) (1983). *The Essential Jung*. New Jersey: Princeton University Press.)
- Jung, C. G. (1933). Die Beziehungen zwischen dem Ich und dem Unbewußten. *GW7*, § 202-406. Olten: Walter Verlag. 1971. (野田倬 (訳) (1982). 自我と無意識の関係. 人文書院.)
- 皆藤章・中桐万里子 (2004). 風景構成法体験の語り. 皆藤章 (編). 風景構成法のときと語り. 誠信書房, pp.53-91.
- 片畑真由美 (2003). 身体感覚がイメージ体験に及ぼす影響. 心理臨床学研究, **21**(5), 462-470.
- 片山知子 (2008). イメージの重み. 藤原勝紀・皆藤章・田中康裕 (編). 心理臨床における臨床イメージ体験. 創元社, pp.247-255.
- 片山知子 (2015). 心理療法の終結におけるイメージのおさめ方に関する一考察. 心理臨床学研究, **32**(6), 673-682.
- 河合隼雄 (1969). 箱庭療法入門. 誠信書房.
- 河合隼雄 (1991). イメージの心理学. 青土社.
- 河合俊雄 (2007). 箱庭療法の光と影. 臨床心理学, **7**(6), 744-748.
- 河合俊雄 (2013). ユング派心理療法. ミネルヴァ書房.
- 川崎克哲 (2007). 箱庭療法の「力動性」について. 岡田康伸・皆藤章・田中康裕 (編). 箱庭療法の事例と展開. 創元社, p.412-424.
- 桑原知子 (2004). 箱庭における「意識」と「無意識」. 箱庭療法学研究, **17**(2), 1-2.
- 牧剛史 (2002). 夢に対する主体的関わり方についての研究. 心理臨床学研究, **20**(3), 265-274.
- Maybruck, P. (1989). *Pregnancy and dreams: How to have a peaceful pregnancy by understanding your dreams, fantasies, daydreams and nightmares*. Los Angeles: Jeremy P. Tarcher, Inc.
- 名島潤慈 (2008). 夢のなかに表れる感情の分類. 山口大学心理臨床研究, (8), 3-12.
- 中井久夫 (1972). 精神分裂病の寛解過程における非言語的接近法の適応決定. 芸術療法, (4), 13-25.
- 中野江梨子 (2010). PDI の前後における風景構成法体験の変化について. 心理臨床学研究, **28**(2), 207-219.

- Neumann, E. (1971). *Ursprungsgeschichte des Bewusstseins*. Olten: Walter-Verlag. (林道義 (訳)
(2006). 意識の起源史. 紀伊国屋書店.)
- 西村洲衛男 (2002). 夢と箱庭. 岡田康伸 (編). 現代のエスプリ別冊 箱庭療法の本質と周辺.
至文堂, pp.156-169.
- 岡田斉 (2001). 夢想起における感情別体験頻度. 文教大学人間科学部人間学研究, (23), 45-54.
- 岡田康伸 (1993). 箱庭療法の展開. 誠信書房.
- 大谷真弓 (2008). イメージが形になることの意味. 藤原勝紀・皆藤章・田中康裕 (編). 心理
臨床における臨床イメージ体験. 創元社, pp.283-290.
- 大谷真弓 (2009). 創作の視点からみた風景構成法. 皆藤章 (編). 現代のエスプリ 風景構成
法の臨床. 至文堂, pp.57-65.
- 佐藤仁美 (2013). 心理療法過程において生きられる空間とその作り. 箱庭療法学研究, **25**(3),
65-78.
- 高橋紗也子 (2014). 初期アルツハイマー型認知症の高齢者の内的世界. 箱庭療法学研究, **27**(1),
53-64.
- 鑓幹八郎 (1998). 夢分析と心理療法. 創元社.
- Winnicott, D. W. (1971). *Playing and Reality*. London: Tavistock Publications Ltd. (橋本雅雄 (訳)
(1979). 遊ぶことと現実 現代精神分析双書第Ⅱ期第4巻. 岩崎学術出版社.)
- 山本昌輝 (2002). 「箱庭」と「こころの包み」. 箱庭療法学研究, **15**(1), 3-16
- 山中康裕・武野俊弥 (1981). 箱庭療法, その技法と適応. 大森健一・高江洲義英・徳田良仁 (編).
芸術療法講座 3 芸術療法の諸技法とその適応決定. 星和書店, p.41-60.
- (心理臨床学講座 博士後期課程 3 回生)
(受稿 2016 年 9 月 9 日、受理 2016 年 11 月 4 日)

夢・箱庭・風景構成法に関する一考察

—イメージとそれを体験する主体との関係性の視点から—

千葉 友里香

主体の内から生じる自律的なイメージとの関わりの中で、主体がなぜ変容していくのかを明らかにするためには、イメージとそれを体験する主体との関係性に焦点を当てることが重要な意味を持つ。本論文では、自律的なイメージが表れる心理療法の技法としての夢、箱庭、風景構成法を取り上げ、夢と夢み手との関係性においては主体の二重構造、感情、言葉という点から、箱庭と作り手との関係性においては箱庭の三次元性の点から、風景構成法と描き手との関係性においては見守り手によるアイテムの教示と他者性という点から、各技法の構造の差異によるイメージと主体との関係性の特徴について論じた。それにより、自律的なイメージとの関わりにおいて主体には、感情、言葉、身体感覚、境界、セラピストとの関係性などに関する多様な体験がなされていることが示され、イメージとの関わりにおける主体の変容の様相を明らかにする上で、重要な視点であると考えられた。

Characteristics of Dream, Sandplay, Landscape Montage Technique: from the Viewpoint of the Relationship between Image and the Subject Experiencing the Image

CHIBA Yurika

It is important to focus on the relationship between image and the subject experiencing the image to explore why the subject changes by approaching their autonomous images. This article discusses the Dream, Sandplay, Landscape Montage Technique as a psychotherapy technique. The characteristics were revealed based on structural differences regarding the relationship between Dream and the client from the viewpoint of the dual structure of subject, feelings, and words; the relationship between Sandplay and the client from the viewpoint of the three-dimensional structure of Sandplay; and the relationship between Landscape Montage and the client from viewpoint of the instruction of items by the therapist as another person. This study showed various kinds of experiences in the subject regarding the feelings, words, body senses, boundaries and relationship with therapist. Therefore, the viewpoint of the relationship between image and the subject experiencing the image was essential to explore why the subject changed by approaching their image.

キーワード： イメージの自律性、イメージと主体との関係性、夢・箱庭・風景構成法

Keywords: Autonomy of image, Relationship between image and the subject,
Dream and Sandplay and Landscape Montage Technique

